島根県立大学出雲キャンパス
紀要　第10巻，25-32，2015

A公立短期大学看護師養成課程卒業生・専攻科修了生の病院における看護実践能力に関する看護管理者の評価

加藤　真紀・坂根可奈子・別所　史恵
濱村美和子・吉川　憂子・吾郷美奈恵

概　　要

A公立短期大学看護師養成課程卒業生及び専攻科修了生が就職している病院における看護実践能力について，看護管理者の評価を明らかにすることを目的とし，無記名自記式調査を実施した。その結果，全ての項目において平均値3.0以上，23項目中22項目の中央値が4.0（「そう思う（5点）」～「そう思わない（1点）」）であり，概ね肯定的であった。看護実践の項目をみると，倫理的実践能力や人間関係形成能力の平均値は高い傾向であり，自己研鑽能力や看護職としての自信はやや低い傾向であった。今後の課題として，看護基礎教育における自己研鑽力の育成について強化していく取り組みが必要であることが示唆された。

キーワード：看護実践能力，看護管理者，評価

Ⅰ．はじめに

我が国では，少子高齢化の進展や急速な医学の進歩によって，医療の高度化・複雑化，在宅医療への移行等，医療ならびに看護を取り巻く環境は著しく変化している。これらを背景に，様々な変化に対応できる看護実践力を備えた質の高い看護師の育成が求められている。看護基礎教育過程で育成すべき看護実践能力は，生涯成長し続けるために必要な基盤となる能力であり，将来を見据えた長期的な視点から検討することが重要である。

A公立短期大学（以下A短期大学）は1997年度に看護師養成3年過程として初めての卒業生を送り出し，1998年度には保健師養成1年過程と助産師養成1年過程として初めての修了生を送り出した。2012年に公立大学となり，短期大学部看護学科の募集を停止した。その間2,000名あまりの卒業生・修了生を送り出し，その6割程度が県内に就職している。そして，2016年3月には学士課程となった看護学部の学生が卒業を迎える予定である。

A短期大学は開学から県内高校からの進学・県内での就職を念頭に，県内の地域に貢献する看護職の育成に努めてきた。昨今の複雑に変化する臨床現場で働くA短期大学卒業生・修了生の看護実践能力について現状と評価を把握し，学士課程となった看護学部における看護基礎教育に引き継いでいくことが重要であると考えた。

これまでA短期大学では，在学中の看護基本技術到達度評価（林，2010）や卒業時の特性評価を含むカリキュラム評価（三島，2010）等をおこなってきたが，卒業生の受け入れ側である就職施設の看護管理者から入職後の卒業生・修了生の看護実践能力に関する評価は十分に実施していない。

そこで本研究では，A短期大学卒業生及び専

本研究は平成25年度－27年度島根県立大学特別研究費の助成をうけて実施したものである。

攻科修了生が就職している県内病院における看護実践能力について，看護管理者の評価を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．研究方法

1．対象

県内の病院施設59施設のうち研究協力の同意が得られた50施設の看護管理者（師長，課長を含む）349名である。

2．調査期間

2014年10月～11月

3．調査方法

無記名自記式の質問紙法を実施した。調査用紙の配布は病院施設ごとに郵送し，看護の代表の協力を得て対象者に配布した。回収は，調査用紙に同封した返信封筒で個別に郵送回収した。

4．調査項目

1）対象者の背景

所属機関の病床数，職種（看護師，助産師），これまで一緒に働いたA短期大学の卒業生・修了生数について質問した。

2）看護学科卒業生・専攻科修了生の看護実践能力に関する看護管理者の評価

A短期大学看護学科のカリキュラム評価を目的として作成・実施してきた調査のうち，学生の卒業時の特性評価として使用している項目を基に作成した。調査項目は23項目である。

質問項目の回答は，「そう思う（5点）」，「ややそう思う（4点）」，「どちらともえいない（3点）」，「あまりそう思わない（2点）」，「そう思わない（1点）」の5件法とした。

本調査では，看護管理者の所属施設に勤務するA短期大学卒業生・修了生全体の看護実践能力の評価として回答を求めた。

5．分析方法

対象者の属性およびA短期大学卒業生・修了生の看護実践能力に関する評価の記述統計を算出した。看護実践能力に関する評価を病院規模別に，一元配置分散分析，多重比較を実施した。

統計解析にはSPSS ver21.0 for Windowsを用い，統計的有意水準は5％未満とした。

Ⅲ．倫理的配慮

対象者には研究協力の依頼書を同封し，研究の趣旨・目的，研究協力の自由意思とデータの守秘を説明し，調査用紙に回答し，投函をもって研究協力に同意が得られたとすることを明記した。また，本研究で得られたデータは，研究目的のみに使用し，個人が特定されることはないことや，研究成果は関連学会や論文等で公表すること，その際，データは統計学的に処理され，所属や個人を特定されることがないよう，匿名性を保証することを明記した。

なお，本研究は島根県立大学出雲キャンパス研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号101）。

Ⅳ．結　　果

1．対象者の特徴

対象者349名で回収数は245名より回答を得た（回収率70.2％）。そのうち，A短期大学卒業生・修了生と一緒に働いたことがないと回答した者（38名）を除いた207名（84.5％）を分析対

表1．対象者の基本属性

n=207

	全体		99床以下		100～199床		200～399床		400床以上	
	n	%	n	%	n	%	n	%	n	%
	207	100	19	9.2	60	29.0	69	33.3	59	28.5
職種										
看護師	195	94.2	16	7.7	58	28.0	65	31.4	56	27.1
助産師	11	5.3	3	1.5	2	1.0	3	1.4	3	1.4
無回答	1	0.5	0	0.0	0	0.0	1	0.5	0	0.0
一緒に働いたことのある卒業生・修了生数										
4名以下	120	58.0	16	7.7	39	18.8	45	21.7	20	9.7
5名～9名	48	23.2	0	0.0	16	7.7	19	9.2	13	6.3
10名以上	39	18.8	3	1.5	5	2.4	5	2.4	26	12.6

表２．卒業生・修了生の病院における看護実践能力に関する看護管理者の評価

	n（人数）	平均値	標準偏差	最小値	最大値	最頻値	中央値	四分位数	
								第1四分位数	第3四分位数
問1　人との信頼関係を基盤とした人間関係を形成できる	207	3.94	0.83	2.00	5.00	4	4	3.00	5.00
問2　人々に共感をもって接することができる	207	3.97	0.80	2.00	5.00	4	4	4.00	5.00
問3　他者の価値観を尊重することの大切さがわかっている	207	3.87	0.80	1.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問4　看護の対象者を様々な側面から理解する視点が身についている	207	3.79	0.71	2.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問5　対象の状況を判断し、ニーズを把握することができる	207	3.84	0.74	2.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問6　事実に基づいて多角的に物事を分析できる	207	3.65	0.74	2.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問7　対象の状況に応じた援助計画を立案できる	207	3.80	0.71	2.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問8　安全に配慮した基本的な看護技術ができる	207	3.84	0.79	2.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問9　看護基礎教育で学んだ原理原則を活かして個々の対象に応用できる	207	3.77	0.77	2.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問10　コミュニケーションを円滑にとりながらケアを提供できる	206	3.93	0.83	2.00	5.00	4	4	3.00	4.25
問11　自分の看護実践の過程を評価できる	206	3.75	0.75	2.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問12　看護者として生命と人権を尊重した倫理的な判断ができる	206	3.84	0.72	2.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問13　自己を客観視し、自律的に行動できる	206	3.59	0.78	2.00	5.00	3	4	3.00	4.00
問14　チームで協働して活動するための個々の役割や責任を理解している	207	3.88	0.81	2.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問15　専門職者としてふさわしい言葉遣いやマナーを身につけている	207	3.79	0.83	1.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問16　プライバシーと秘密保持に関わる行動がとれる	207	4.13	0.71	1.00	5.00	4	4	4.00	5.00
問17　看護について幅広い知見を得ることができる	207	3.63	0.73	2.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問18　様々な問題に取り組む自信をもっている	207	3.43	0.74	2.00	5.00	3	3	3.00	4.00
問19　看護専門職者としての責任を自覚している	207	3.93	0.79	1.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問20　看護専門職者としての誇りをもっている	207	3.79	0.76	1.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問21　看護について、学び続ける意欲をもっている	207	3.89	0.81	1.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問22　看護職として、将来への展望をもっている	207	3.58	0.75	1.00	5.00	4	4	3.00	4.00
問23　看護職としてキャリア形成していくための基礎的能力が備わっている	207	3.77	0.77	1.00	5.00	4	4	3.00	4.00

値は欠損値を除く

象者とした。

分析対象者の基本属性は表1の通りである。勤務する病院の病床数の内訳は，99床以下が19名（9.2％），100床から199床が60名（29.0％），200床から399床が69名（33.3％），400床以上が59名（28.5％）であった。一緒に働いたことのある卒業生・修了生数は，4名以下が58.0％と多く，5名から9名が23.2％，10名以上は18.8％であった。

２．卒業生・修了生の看護実践能力に関する看護管理者の評価

A短期大学卒業生・修了生の看護実践に関する看護管理者の評価について表2に示した。

A短期大学卒業生・修了生の看護実践能力に関する看護管理者の評価は，すべての項目が平均値3.0以上，23項目中22項目の中央値が4.0であった。

看護実践能力の評価について各項目の平均値を降順でみると，平均値が高かった3項目は，『プライバシーと秘密保持に関わる行動がとれる』4.13 ± 0.71，次いで『人々に共感をもって接することができる』3.97 ± 0.80，『人との信頼関係を基盤とした人間関係を形成できる』3.94 ± 0.83であった。一方，各項目の平均値の降順で低かった3項目は，『様々な問題に取り組む自信をもっている』3.43 ± 0.74，『看護職として将来への展望をもっている』3.58 ± 0.75，『自己を客観視し，自律的に行動できる』3.59 ± 0.78であった。

次に病院規模別の看護実践能力評価の平均値及び比較結果を表3に示す。

病院規模別の看護実践能力の評価23項目の各項目の平均値について，上位と下位それぞれ3項目を挙げ特徴をみてみると，平均値が高い3項目は，99床以下の病院では，『プライバシーと秘密保持に関わる行動がとれる』，『対象者の状況を判断し，ニーズを把握することができる』，『コミュニケーションを円滑にとりながらケアを提供できる』であった。100床～ 199床の病院では，『人々に共感をもって接することができる』，『人との信頼関係を基盤とした人間関係を形成できる』，『プライバシーと秘密保持に関わる行動がとれる』であった。200床～ 399床の病院では，『プライバシーと秘密保持に関わる行動がとれる』，『看護専門職者としての責任を自覚している』，『人々に共感をもって接することができる』，『他者の価値観を尊重することの大切さがわかっている』であった。400床以上の病院では，『プライバシーと秘密保持に関わる行動がとれる』，『コミュニケーションを円滑にとりながらケアを提供できる』，『チームで協働して活動するための個々の役割や責任を理解している』，『看護専門職者としての責任を自覚している』であった。病院の規模別に高く評価される項目が異なるものの，『プライバシーと秘密

表３．卒業生・修了生の病院規模別における看護実践能力に関する看護管理者の評価

n=207

	99床以下 (n=19)		100～199床 (n=60)		200～399床 (n=69)		400床以上 (n=59)		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
問1　人との信頼関係を基盤とした人間関係を形成できる	3.74	± 0.15	4.10	± 0.10	4.01	± 0.10	3.76	± 0.11	.065
問2　人々に共感をもって接することができる	3.84	± 0.14	4.15	± 0.09	4.04	± 0.10	3.73	± 0.11	.034
問3　他者の価値観を尊重することの大切さがわかっている	3.79	± 0.16	3.93	± 0.11	4.04	± 0.10	3.64	± 0.10	.027
問4　看護の対象者を様々な側面から理解する視点が身についている	3.84	± 0.14	3.87	± 0.09	3.94	± 0.09	3.53	± 0.08	.004
問5　対象の状況を判断し、ニーズを把握することができる	3.95	± 0.14	3.95	± 0.09	3.86	± 0.10	3.68	± 0.09	.200
問6　事実に基づいて多角的に物事を分析できる	3.58	± 0.14	3.80	± 0.09	3.74	± 0.10	3.41	± 0.08	.019
問7　対象の状況に応じた援助計画を立案できる	3.63	± 0.16	3.95	± 0.09	3.90	± 0.09	3.58	± 0.09	.016
問8　安全に配慮した基本的な看護技術ができる	3.79	± 0.18	3.97	± 0.09	3.90	± 0.10	3.66	± 0.10	.226
問9　看護基礎教育で学んだ原理原則を活かして個々の対象に応用できる	3.79	± 0.14	3.87	± 0.10	3.87	± 0.10	3.54	± 0.09	.067
問10 コミュニケーションを円滑にとりながらケアを提供できる	3.89	± 0.20	4.08	± 0.09	3.90	± 0.11	3.81	± 0.11	.375
問11 自分の看護実践の過程を評価できる	3.63	± 0.16	3.85	± 0.10	3.84	± 0.09	3.57	± 0.09	.115
問12 看護者として生命と人権を尊重した倫理的な判断ができる	3.74	± 0.15	3.93	± 0.09	4.00	± 0.09	3.59	± 0.09	.006
問13 自己を客観視し、自律的に行動できる	3.53	± 0.12	3.68	± 0.10	3.70	± 0.10	3.41	± 0.10	.120
問14 チームで協働して活動するための個々の役割や責任を理解している	3.74	± 0.18	3.87	± 0.10	4.01	± 0.10	3.78	± 0.10	.323
問15 専門職者としてふさわしい言葉遣いやマナーを身につけている	3.74	± 0.20	3.78	± 0.10	3.93	± 0.11	3.66	± 0.10	.199
問16 プライバシーと秘密保持に関わる行動がとれる	4.11	± 0.15	4.10	± 0.10	4.33	± 0.08	3.92	± 0.08	.004
問17 看護について幅広い知見を得ることができる	3.68	± 0.17	3.73	± 0.09	3.75	± 0.09	3.37	± 0.08	.017
問18 様々な問題に取り組む自信をもっている	3.37	± 0.14	3.52	± 0.09	3.55	± 0.10	3.24	± 0.09	.092
問19 看護専門職者としての責任を自覚している	3.74	± 0.20	3.97	± 0.10	4.09	± 0.10	3.78	± 0.09	.067
問20 看護専門職者としての誇りをもっている	3.68	± 0.20	3.82	± 0.10	3.87	± 0.10	3.71	± 0.08	.486
問21 看護について、学び続ける意欲をもっている	3.79	± 0.18	3.97	± 0.11	4.00	± 0.11	3.71	± 0.09	.058
問22 看護職として、将来への展望をもっている	3.58	± 0.16	3.67	± 0.11	3.67	± 0.09	3.39	± 0.08	.098
問23 看護職としてキャリア形成していくための基礎的能力が備わっている	3.68	± 0.17	3.82	± 0.11	3.86	± 0.10	3.66	± 0.08	.366

一元配置分散分析Kruskal Wallis検定　その後ペアごとの比較にて多重比較を実施。
*p＜.05、**p＜.01

保持に関わる行動がとれる』についてはどの病院規模においても共通して高く評価されていた。

一方，各項目のうち全体で平均値が低い3項目は，『様々な問題に取り組む自信をもっている』，『看護職として将来への展望をもっている』，『自己を客観視し，自律的に行動できる』であった。病院規模別にみると99床以下，100床～199床，200床～399床の病院で，順位の違いはあるものの共通して，『様々な問題に取り組む自信をもっている』，『看護職として将来への展望をもっている』，『自己を客観視し，自律的に行動できる』が低く評価されていた。400床以上の病院では，『看護職として，将来への展望をもっている』に次いで『看護について幅広い知見を得ることができる』，『看護職として，将来への展望をもっている』が低く評価されていた。

さらに，看護実践能力の評価を病院の規模別に4群間で比較した。4群間で有意差がみられた項目については，多重比較を実施した。その結果，7項目において有意差が認められた。400床以上に比べ100～199床及び200床～399床では評価が高い傾向があり，有意差は次の通りであった。『他者の価値観を尊重することの大切さがわかっている』の400床以上と200～399床（p<0.05），『看護の対象を様々な側面から理解する視点が身についている』の400床以上と100～199床（p<0.05），200～399床（p<0.01），『事実に基づいて多角的に物事を分析できる』の400床以上と100～199床（p<0.05），200～399床（p<0.05），『対象の状況に応じた援助経過卯を立案できる』の400床以上と100～199床（p<0.05），『看護者として生命と人権を尊重した倫理的な判断ができる』の400床以上と100～199床（p<0.05），200～399床（p<0.01），『プライバシーと秘密保持に関わる行動がとれる』の400床以上と200～399床（p<0.01），『看護について幅広い知見を得ることができる』の400床以上と200～399床（p<0.05）で有意差を認めた。

Ⅴ．考　　察

A短期大学卒業生・修了生の看護実践に関する看護管理者の評価をおこなった。A短期大学はこれまで2,000名あまりの卒業生・修了生を

送り出し，そのおよそ6割が県内で就職をしている。今回，卒業生・修了生の県内病院における看護実践の状況について看護管理者から評価を得た。一人ひとりの卒業生・修了生の看護実践を評価するものではなく，病院施設に勤務するA短期大学卒業生・修了生の看護実践の評価として調査したものであるため，卒業生・修了生の看護実践の傾向として評価を得たものと考えられる。しかし，この結果により本学で看護基礎教育を受けた学生が，病院での看護実践をどのように評価されているのかという一定の傾向から，看護基礎教育のあり方について示唆が得られるものとして分析した。

A短期大学卒業生・修了生の病院における看護実践に関する看護管理者からの評価についての全体の結果としては，全ての項目において平均値3.0以上，23項目中22項目の中央値が4.0であり，全体的には肯定的評価であったと言えるのではないかと考える。これは，先に述べたように，卒業生・修了生の個別の評価ではなく，全体的な傾向として評価を得たことにより「どちらでもない」以上の評価になったことが考えられる。しかし一方で，卒業生・修了生が実践する看護として際だって課題となるような項目もなく，看護基礎教育で均一的に看護実践能力の育成ができていると考えられる。

次に，全体で平均値が高かった項目および病院規模別で平均値が高かった項目をみると『プライバシーと秘密保持に関わる行動がとれる』，『コミュニケーションを円滑にとりながらケアを提供できる』などであった。これらは，A短期大学が卒業時に実施する特性評価において，学生自身が短期大学看護師養成課程修了時点でできると認識し，高く評価している項目と同様な結果であった（三島，2010）。また，卒後の看護師の看護実践能力において，「看護実践能力自己評価尺度」（中山，2010）を使用した研究結果で，これら倫理的実践能力や人間形成能力については同様に高く評価されており，卒後から高い能力を維持していることが報告されている（佐々木，2013）（萩野，2014）。しかし，近年の同世代の若者同様，看護学生の基本的な生活能力や常識，学力が変化してきていると同時に，コミュニケーション能力が不足している傾向があり，そのため看護基礎教育では専門分野の学習を深める他，職業に必要な倫理観や責任感，豊かな人間性や人権を尊重する意識を育成していく必要がある（厚労省，2007）と指摘されている。そのような状況の中でそれぞれの大学が育成に工夫をしている状況である。A短期大学においても倫理的実践能力や人間関係形成能力は，看護基礎教育修了時点で担保しておきたい実践能力であり，講義・演習・実習を通して様々な場面で育成することを意識して関わっている。その結果，学生自身が卒業時にできると認識でき，さらに卒後の臨床における看護実践でも継続して発揮され，看護管理者からも同様に高く評価されていると言える。同時に，就職先の施設での継続した教育の成果ではないかと考えられる。

一方，卒業生・修了生の看護実践に関する看護管理者の評価について，全体で平均値が低かった項目および病院規模別で平均値が低かった項目をみると，『様々な問題に取り組む自信をもっている』，『看護職として将来への展望をもっている』，『自己を客観視し，自律的に行動できる』などであり，自己研鑽能力や看護への自信であった。A短期大学学生が卒業時に実施する特性評価において低く評価している項目と同様な結果であり，特に『様々な問題に取り組む自信をもっている』の項目は卒業時の自己評価も平均値が一番低かった項目である（三島，2010）。今回の本学卒業生・修了生の実践能力における看護管理者の評価とも同様の結果が示された。卒業時に学生自身が認識する看護実践能力においてできると感じにくい項目は，卒後の臨床実践においても発揮されにくく，看護管理者の評価においても低く評価されていると言える。

看護系大学では，基礎教育において生涯学習の基盤となる専門職としての自律性など，看護実践能力を高めるための自己教育力の育成が求められている。しかし，看護系大学卒業生の看護実践能力調査において，自己研鑽能力は低い状況（佐々木，2013）（濵，2013）（赤松，2008）が示されており，どのように自己研鑽力を育成するかが求められていると言える。

A短期大学においても，これまで看護学生が

自ら学ぶ力を育成するために，ポートフォリオ型の学習システム（吾郷，2009）を展開してきた。今後も看護基礎教育における自己研鑽力の育成について評価しながら，自己研鑽力を高める教育を強化していく取り組みが必要であることが示唆された。現在，学修者が主体的に学ぶ方法としてアクティブ・ラーニングが注目され，それぞれの大学等でも取り組みが始まっている。このような教育方法の工夫により主体的に学ぶ力を養うと同時に，将来の目指す看護師像を描き，専門職者として研鑽し続けられるような支援が必要である。また，看護実践力が経験とともに高まっていく能力であることを踏まえると，看護基礎教育だけの取り組みではなく，臨床における継続教育との連携のあり方も検討していく必要があると考える。

今回，病院規模別に看護実践能力の評価を看た際，400床以上の病院に比べ，100～199床及び200～399床の病院の評価が高い傾向がみられた。今回の調査では，卒業生・修了生の卒後経験年数で分けて評価を得たものではないため，有意差の要因が看護基礎教育卒業・修了時点での差であるか，卒後の継続教育や経験によるものの差であるかを明確にすることはできなかった。しかし一方で，看護の実践能力はそれぞれどのレベルを求めるかによって「できる」と判断するレベルが異なってくる。病床規模が大きく，より急性期の患者を対象とする病院では，看護の実践力が高く求められていることが推察できる。

本調査は，卒業生・修了生の看護実践能力を看護管理者から評価を得たものであり，卒業生・修了生の看護実践能力を一定の傾向としてみることはできた。しかし，卒後の継続教育や経験による影響も考慮すべき点であり，看護基礎教育を検討していくうえでは限界があった。しかし，われわれは，並行した調査で卒業生・修了生から看護実践能力の自己評価を得ている。今回の看護管理者への調査から得られた結果及び示唆とともに，卒業生・修了生の看護実践能力自己評価を明らかにしていくなかで多角的に分析し，看護基礎教育を検討していきたい。

Ⅵ. 結　　論

A短期大学卒業生・修了生の看護実践に関する看護管理者の評価から以下のことが明らかとなった。

1．23項目の全ての項目において，すべての項目が平均値3.0以上，23項目中22項目の中央値が4.0であり，全体的に肯定的な評価であった。
2．倫理的実践能力や人間関係形成能力の平均値は高い傾向であり，自己研鑽能力や看護職としての自信はやや低い傾向であった。
3．課題として，看護基礎教育における自己研鑽力の育成について強化していく取り組みが必要であることが示唆された。

謝　　辞

本研究の調査にご協力くださいました対象病院の看護の代表者の皆さま，看護管理者の皆さまに心より感謝申し上げます。なお，本研究は平成25年～27年度島根県立大学特別研究費の助成を受けて実施したものであり，本稿の一部は第25回日本医学看護学教育学会学術集会にて発表したものである。

文　　献

吾郷美奈恵，三島三代子，梶谷みゆき他（2009）：看護基礎教育における自己教育力育成に向けた“だんだんeポートフォリオシステム”の開発，島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要，(3)，105-112.

赤松公子，山内栄子，後藤淳他（2008）：看護実践能力育成に関する基礎教育の検討：卒業生の自己評価と職場における客観評価の比較，大学教育実践ジャーナル，6，19-25.

濵耕子，薬師神裕子，井上仁美他（2013）：看護系大学卒業生の看護実践能力に影響する要因の分析，日本看護学教育学会誌，23（1），１-10.

林健司，三島三代子，別所史恵，松本亥智江（2010）：３年次臨地実習における看護基本技術の経験状況と課題－「看護基本技術自

己評価表」5年間の年次推移より－，島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要，(4)，65-71.

三島三代子，田原和美，吉川洋子他 (2010)：看護学科学生によるカリキュラム総括評価，島根県立大学短期大学部出雲キャンパス研究紀要，(4)，57-64.

中山洋子，工藤真由美，石原昌他 (2010)：看護実践能力の発達過程と評価方法に関する研究－臨床経験1年目から5年目までの看護系大学卒業看護師の実践能力に関する横断調査－，日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 (A)）報告書.

荻野待子，鈴木みゆき，土居洋子，新井信之 (2014)：新卒看護師の大学時代の学習状況と看護実践能力の関連，兵庫医療大学紀要，2 (1)，47-56.

佐々木晶子，深田美香，奥田玲子他 (2013)：A 県の臨床経験1年目から5年目の看護師の実践能力に関する自己評価，米子医学雑誌，64 (6)，154-162.

The Evaluation of The Nursing Administrator about Ability of Nursing Practice at The Hospital of The A Public Junior College Nursing Mentor Training Course Graduate, Honors Course Completion Student

Maki KATO, Kanako SAKANE, Fumie BESSHO,
Miwako HAMAMURA, Yuko KIKKAWA and Minae AGO

Key Words and Phrases：Ability of nursing practice,
nursing administrator, evaluation